



『日本の伝統色の特徴についてI』 : 日本の伝統色 とフランスの伝統色との比較から

著者	岡本 文子
雑誌名	筑紫女学園短期大学紀要
巻	36
ページ	79-94
発行年	2001-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000702/

『日本の伝統色の特質についてⅠ』

— 日本の伝統色とフランスの伝統色との比較から —

岡本文子

An Analysis of the Characteristics of Japanese Traditional Colors I .

Ayako OKAMOTO

1. 緒言

四季折々に移ろう日本の自然が織り成す美しさが、日本のあらゆる文化的側面に影響を与えていることは言うまでも無いが、その影響はむしろ日本の美意識を形成する上での精神的支柱の一端とも言えるであろう。

現在の日本ではさまざまな色名が使われており、その使われる場に応じて、最も簡潔に表現される系統色名であったり、ヨーロッパの慣用色名であったり、日本の慣用色名であったりする。また日本の慣用色も自然に使われることもあれば、エキセントリックな効果を期待して使われることもある。さらに流行に伴う新しい色名も年々生み出されつつある。しかし、いかに国外から目新しい色が移入されようと、次々に流行色が生み出されようと、それらが日本で受容され定着するためには、それらの色を受容する美意識があって、長い月日の流れを経ることにより時代が結論を出すものである。現代の慣用色と呼ばれるものも古くは平安時代、あるいはそれ以前から継承されてきたものである。

現代では、色と生活するという個人レベルばかりでなく、マーチャンダイジングの側面からも、色をシステムとして把握する必要性がある。人は多くの色を認識し、識別することは出来るが、色という抽象概念を記憶し、伝達したり、正確に表現したりすることは非常に難しいものである。そのためさまざまなカ

ラーシステムが考案され、現在に至っている。

色名の表記についても、基本色名・物体色の色名・系統色名・固有色名・慣用色名・ヒュー&トーンシステムやマンセル値など、用途に応じて駆使されている。

その中でも、一般的に慣用色と呼ばれる色は、日常慣用的に使用している色名であり、日本古来から現代に至る慣用色にヨーロッパやアメリカなどの外来の慣用色を含めて総称される。すなわち日本古来の慣用色は日本の伝統色とも言い換えられる。前述のように、色という抽象概念は記憶し、伝達することが難しいものであるが、慣用色のように背後に「形」や「イメージ」を持つ色は、認識を共有しやすく記憶にとどまりやすいと言える。

従って、共通の美意識を潜在的に共有する生活者の中で繰り返し認知され受容されてきた色とも言えるであろう。

日本の伝統色について、その3属性の要素分析から、どのような色が日本の風土に根ざし、日本の美意識に受容され継承されてきたかを検証したい。またヨーロッパの美意識を代表的に示唆するものとして、フランスの伝統色を取り上げ、その3属性に関する要素分析との比較を通して、更に日本の美意識の再考を試みたい。

2. 方法

2.1. DIC カラーガイド「日本の伝統色」300色を要素分析の対象とした。

2.2. 「日本の伝統色」との比較のため、DIC カラーガイド「フランスの伝統色」321色もまた要素分析の対象とした。

2.3. 対象をコンピュータにスキャンし、更に Adobe Photoshop のカラーピッカーを用いて抽出した各色の要素分析を行った。

カラーモデルには CMYK カラーモデル, RGB カラーモデル, HSB カラーモデルの3種類準備されているが、今回は HSB カラーモデルを採用

した。HSB カラーモデルでは、H(色相)はカラーホイール(色相環)上の位置を示し、純色の「赤」を0度とする。国際的に普及しているマンセルシステム10色相環を基本としており、JIS(日本工業規格)の表示法としても制定されている。本文では系統を示す色名は和名の漢字表記とした。(表1)

表1

0° ~ 17°	赤系	198° ~ 233°	青系
18° ~ 53°	黄赤系	234° ~ 269°	青紫系
54° ~ 89°	黄系	270° ~ 305°	紫系
90° ~ 125°	黄緑系	306° ~ 341°	赤紫系
126° ~ 161°	緑系	341° ~ 360°	赤系
162° ~ 197°	青緑系		

S(彩度)については百分比で示され、S-0は無彩色、S-100は純色となる。同様にB(明度)も百分比で示され、B-0は黒、B-100は白を示す。

- 2.4. 色相について、「日本の伝統色」の要素分析の結果から、色相面での偏りおよび傾向について探索した。
- 2.5. 色相について、「フランスの伝統色」の要素分析の結果から、色相面での偏りや傾向について探索した。
- 2.6. 彩度・明度およびそれらを総合したトーンについて、要素分析の結果から「日本の伝統色」の傾向について探索した。
- 2.7. 彩度・明度およびそれらを総合したトーンについて、要素分析の結果から「フランスの伝統色」の傾向について探索した。
- 2.8. 上記4～7から、日本の伝統色の傾向とフランスの伝統色の傾向を比較検討し考察した。

3. 結果

3.1. 「日本の伝統色」の色相における要素分析の結果は以下の通り。(図1)

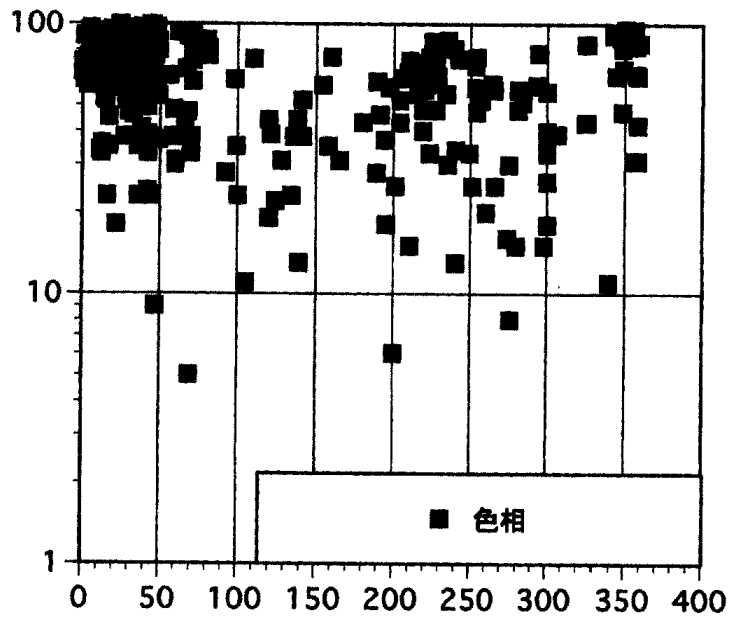


図1 日本

3.2. 「フランスの伝統色」の色相における要素分析の結果は以下の通り。(図2)

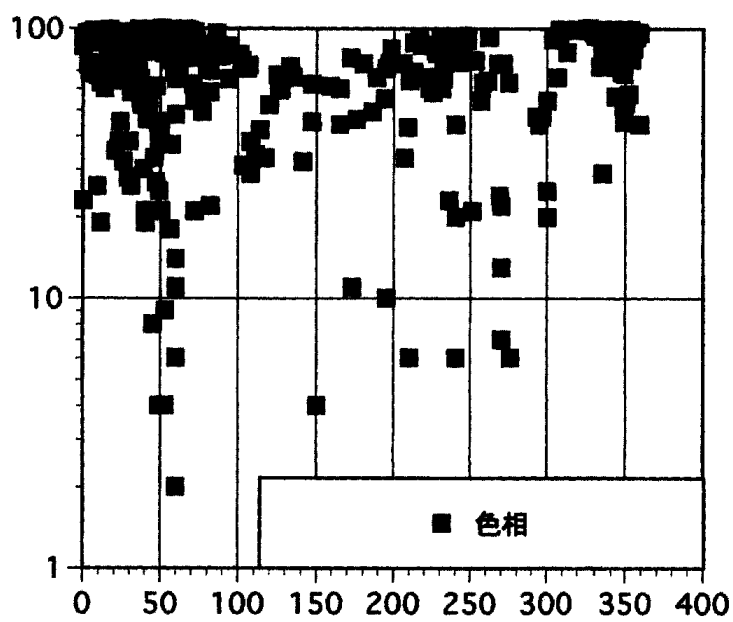


図2 フランス

3.3. 「日本の伝統色」における彩度と明度の分布についての分析結果は以下の通り。(図3)

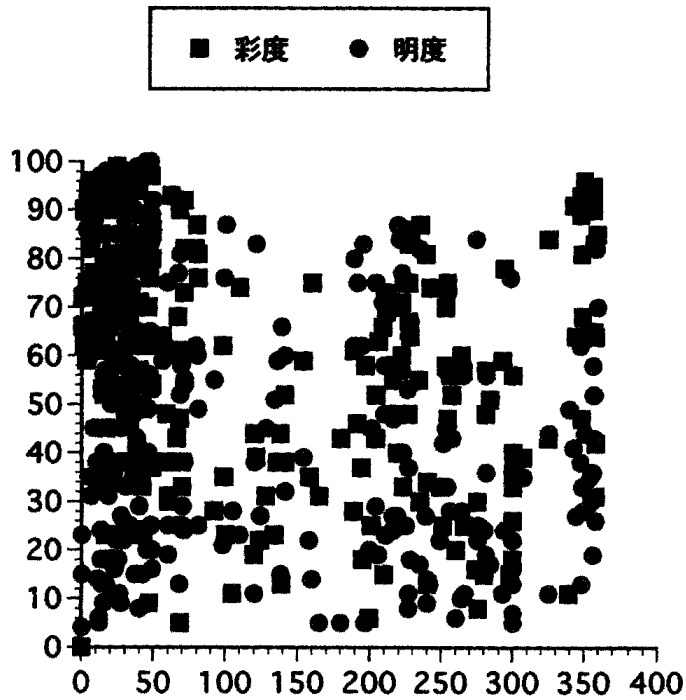


図3 日本

3.4. 「フランスの伝統色」における彩度と明度の分布についての分析結果は以下の通り。(図4)

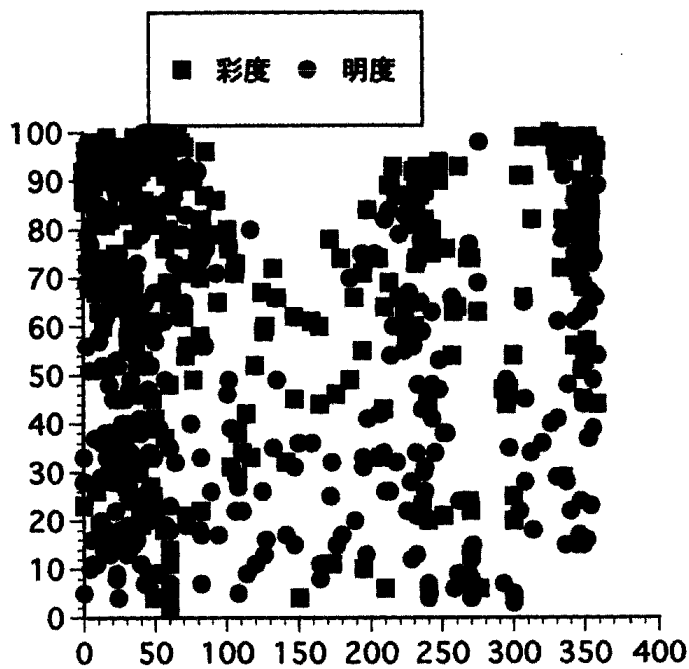


図4 フランス

3.5. 「日本の伝統色」の色相・彩度・明度の要素分析結果を3次元で示した。(図5)

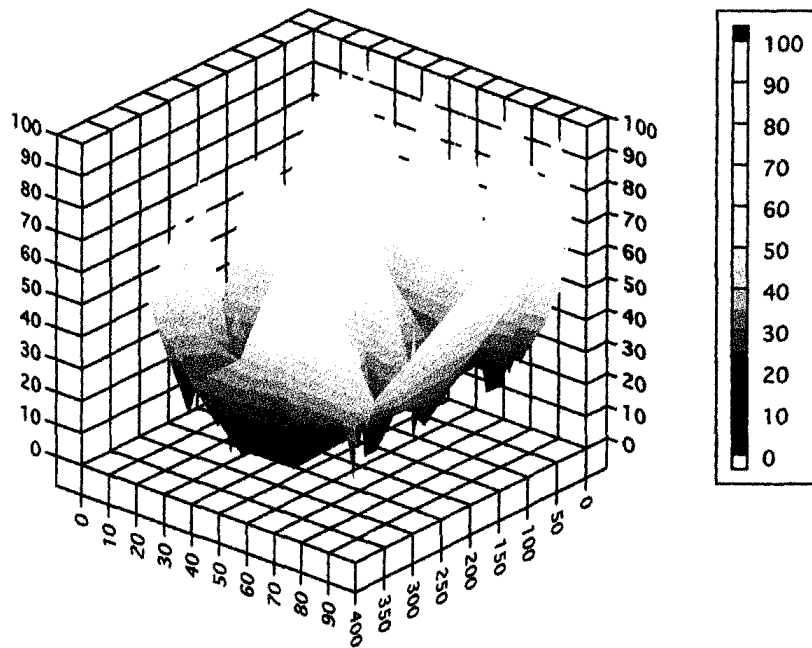


図5 日本

3.6. 「フランスの伝統色」の色相・彩度・明度の要素分析結果を3次元で示した。(図6)

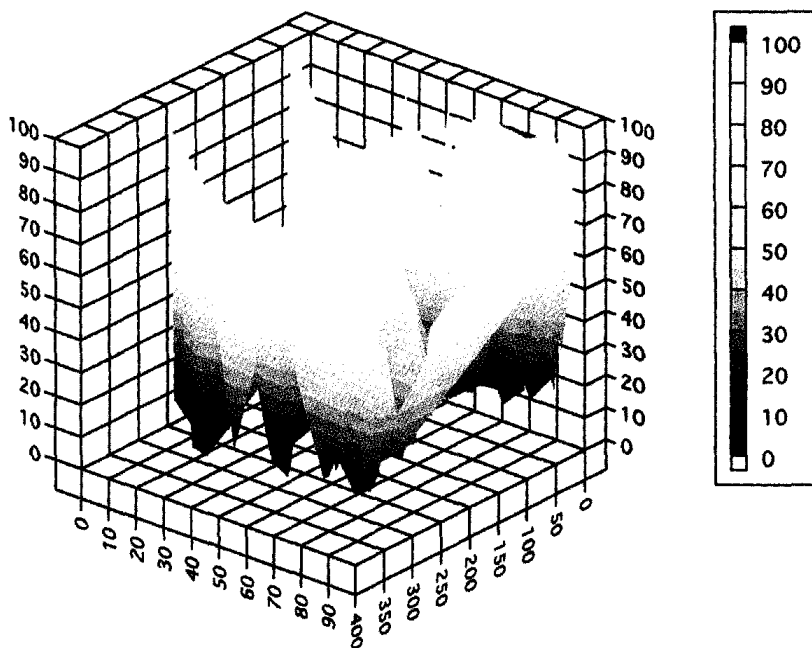


図6 フランス

3.7. 色相の系統別に「日本の伝統色」と「フランスの伝統色」におけるそれぞれの特徴について比較を通して検証した。

《赤系》

赤系では両者共に色名の色数が多く、その中でも「フランスの伝統色」では彩度が高い、つまり鮮やかな色が多い。特にフランボワーズ（図7）やグロゼイユ（図7）、ルージュ ヴィフ（図7）のような色は特に特徴的で、「日本の伝統色」には見られない色である。

「フランスの伝統色」よりも色数としてはやや少ないが、「日本の伝統色」でも赤系の色は多く、かなり鮮やかな色もあるが、「フランスの伝統色」の鮮烈さに比べると沈んで見える程である。実際に明彩度の数値を見ても、「日本の伝統色」では明彩度共に高い色は見られないのに対して、「フランスの伝統色」では明彩度共に高い色が目立っている。「日本の伝統色」の場合には、ややグレイッシュなトーンが多く、一種の曖昧な印象が感じられる。



フランボワーズ

グロゼイユ

ルージュ・ヴィフ

《黄赤系》

10色相の中で「日本の伝統色」「フランスの伝統色」共に色名の数が圧倒的に多いのがこの系統である。「日本の伝統色」では87色、「フランスの伝統色」では89色にも上る。全ての系統を俯瞰して理解されるのは「フランスの伝統色」の方が鮮烈な色が多いことである。やはり黄赤系でも「日本の伝統色」よりも「フランスの伝統色」の方が彩度の高い色の数は多いが、他の系統に比べるとその差はやや少ないと言える。特に「日本の伝統色」の場合はグレイッシュなトーン、つまり彩度が比較的強く明度の高いトーンが多く、色相40°～50°にかけては「フランスの伝統色」で明彩度が高く鮮烈な印象の色が何色も続くのに

対して、「日本の伝統色」では明度が高く彩度の低い色が続く。ここでもやはり色相、彩度、明度が少しずつ異なる色を鋭敏に見分け、楽しむ日本の美意識が理解される。

また両者共に黄赤系の色名が最も多く存在する背景には、染料の調達のような利便性も考えられるが、黄赤系の色を識別する潜在能力を具備している可能性も考えられる。

《黄系》

色相 54° ～ 89° の範囲では「日本の伝統色」の場合、黄系とはいうものの明確に黄色と感じられる色は見られず、「フランスの伝統色」に比べると数も少ないが、明彩度の低いものが多い。「日本の伝統色」の場合、「フランスの伝統色」と同様の色相でありながら黄色と明確に捉えられないのは、彩度が低いためにグレーやベージュとしてより強く認識されるからである。

《黄緑系》

黄緑系では「日本の伝統色」の場合高明彩度の色は見られず、色名の数も黄赤系に比べると極端に少ない。(黄赤系の約8分の1)

彩度で見ると「常盤緑」の74%、「松葉色」の62%がやや高めであるが彩度が低いため深みのある色となっている。ここでもやはりグレイッシュなトーンが多く見られる。

「フランスの伝統色」では同様に色名の数は少なく、黄赤系の89色に対して14色となっているが、比較的鮮やかな色も見られ、彩度の平均を比較してみると、「フランスの伝統色」の55.5%に対して「日本の伝統色」の35.7%と明らかな差がある。しかも明度についても「フランスの伝統色」では「ヴェール・ドー」を除くと全て低明度色である。「ヴェール・ドー」を含めた「フランスの伝統色」の明度の平均値は32.4%であり、「日本の伝統色」の明度の平均値は44.9%である。

《緑系》

緑系でもやはり黄赤系に比べて色名の数が少なく、「日本の伝統色」の場合黄赤系に比べ約8分の1程度である。「フランスの伝統色」の場合では黄緑系

より更に少なくなっている。しかも両者、共黄緑系に見られる特徴が顕著であり、「日本の伝統色」ではグレイッシュな傾向が強く、明度40%~60%の色が多くなっている。

「フランスの伝統色」でも比較的彩度の高い色は見られるものの、高明度の色は見られず、最も高いものでも46%であり、他は全て10~30%の範囲となっている。

《青緑系》

意外なほど、青緑系の色名は両者共に少なく、「日本の伝統色」では黄赤系の約9~10分の1しかない。「フランスの伝統色」でも同様に少なく、黄赤系の約7分の1程度になっている。

青緑系での特徴は両者共に鮮やかな色、つまり高名彩度色が見られないことである。特に「日本の伝統色」では高明度と低明度に偏っており、明度6~61パーセントの範囲の色は無いという極端な結果になっている。

「フランスの伝統色」でも同様に高明度と低明度に偏りが見られるが、「日本の伝統色」では数の上で高明度色の方が多いのに対して、「フランスの伝統色」の場合は「ブルー・クルール」と「ブルー・パール」を除けば全て低明度色であり、「日本の伝統色」とは逆の結果になっている。つまり、青緑系では「フランスの伝統色」の場合、深みのある色を選択し、「日本の伝統色」の場合は浅いあるいは淡いトーンを選択している。

《青系》

色名の数の上では青系統の色名は「日本の伝統色」も「フランスの伝統色」も同程度であり、緑系や青緑系に比べると多くなっている。「日本の伝統色」の明彩度の特徴は、やはり明彩度共に中~低明彩度が多いことである。そのためグレイッシュなトーンも多く、やや沈んだあるいはやや上品な曖昧な印象を持つ色も多く感じられる。

それに対して「フランスの伝統色」では高彩度色が多く、明度は低めである。従って強い印象を与える色や、深みのある色が多くなっている。

《青紫系》

青紫系の色相の範囲では、特に「フランスの伝統色」の強い印象を持つトーンが際立っており、高明度色もわずかに見られるものの高彩度色が特徴をなしている。青系に見られたようなやや淡いトーンのものほとんど見られなくなり、強い印象のトーンの中に強さの統一があり、そこに差異が生じている。

それに対して「日本の伝統色」の場合は、青系よりも更に中明彩度の傾向が強く、中庸の曖昧さが強調された。

また紫～赤紫系の色は日本的なイメージと関連付けられることも多いが、色名の数の上ではむしろ青系の方が多かった。

《紫系》

「日本の伝統色」の紫系では色名数は青系よりも少ないが、唯一「フランスの伝統色」の同系統の数を上回っている。それというのも、「フランスの伝統色」における紫系の色名数が少なく、ほとんど無彩色に近い黒と白が含まれているため、紫系と認識できる色はわずかである。また色名数が少なく極度に低明度の色に偏っているため、どの系統にも見られた鮮烈な印象はここには無い。

一方「日本の伝統色」の場合は、青紫系で述べたようなトーンに見られる特徴が更に顕著であり、特に明度の低いものが多く、中明彩度の微妙な差異の醸し出す意趣はここに集約されている。

《赤紫系》

赤紫系の「日本の伝統色」では極端に色名数が少ないため、わずか4色をもって特徴や共通性を述べることはできないが、黄赤系に比べると約22分の1しかないその数の少なさは特記すべきである。

一方「フランスの伝統色」の場合は高彩度の色が集中しており、彩度の平均値は92.2%にも達している。しかも明度の平均値は44.2%であり、強いトーンでありながら非常に華やかな印象を貫いている。

青系、青紫系を含め、色相 235° ～ 341° の範囲では「日本の伝統色」「フランスの伝統色」それぞれの特徴が最も顕著に表れていると言えよう。

3.8. 前項で述べた包括的特質が顕著な例として、色相 30° ～ 90° および 234° ～ 341° について図に示した。(図8～11)

これらの「フランスの伝統色」と「日本の伝統色」を比較すると、前述のように、「フランスの伝統色」では明彩度が極めて高く鮮烈な印象の色彩が多く、また対照的に明彩度ともに低い、暗色もまた比較的多い。それに対して、「日本の伝統色」では明度が高く彩度が中程度の柔らかい印象の色彩と明彩度がともに中程度の色彩が多く、やや沈みがちで落ち着いた印象の微妙な色彩が多いことが改めて理解される。

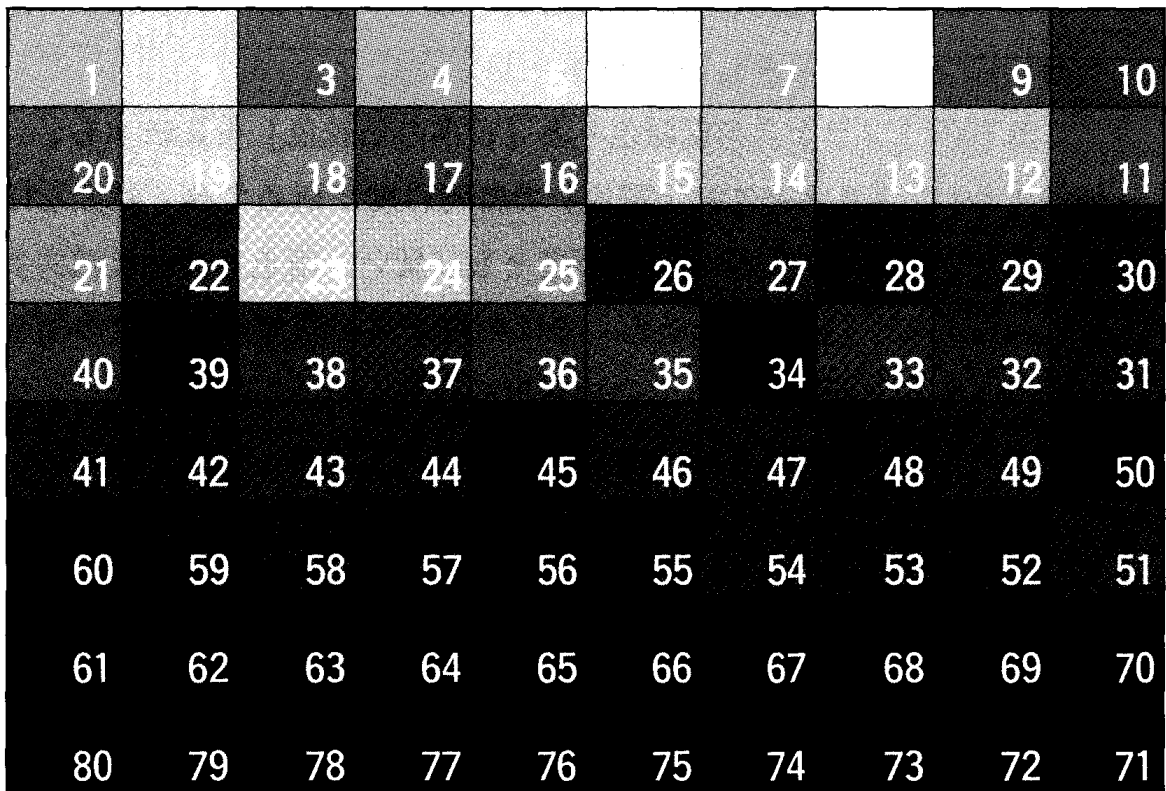


図8 日本の伝統色（色相30度～90度）

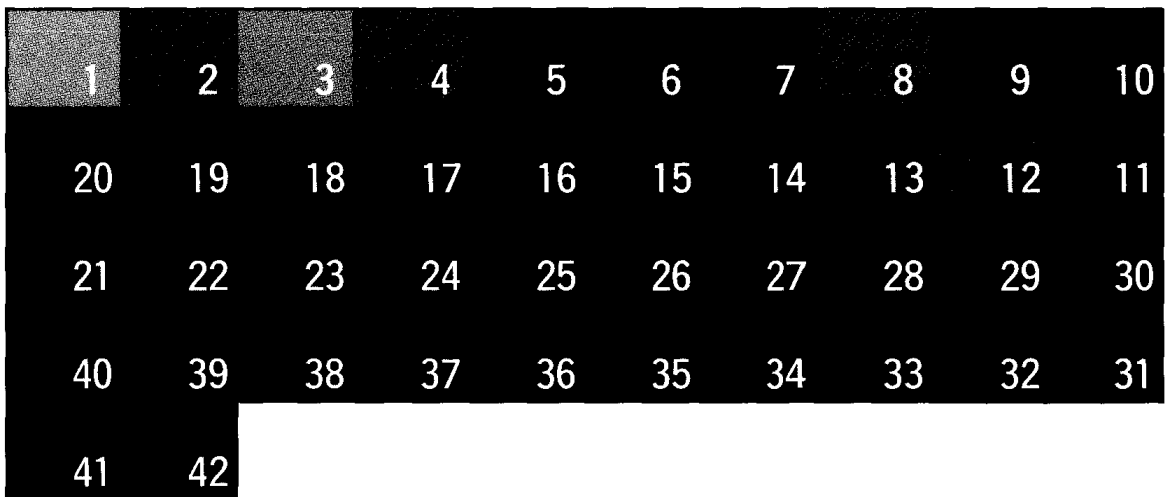


図10 日本の伝統色（色相234度～341度）

			4		5		8		10
		18		16	15	14	13	12	11
21	22	23	24		26		28		30
40	39	38	37	36	35	34		32	
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
101	102	103	104						

図9 フランスの伝統色（色相30度～90度）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
					55	54	53	52	51

図11 フランスの伝統色（色相234度～341度）

3. 結論

以上述べてきた結果から、「日本の伝統色」と「フランスの伝統色」の比較を通して、日本に継承されてきた日本の美意識に基づく「日本の伝統色」の特質について考察するにあたって、日本とフランス共和国の概要について、まず述べておきたい。

フランス共和国の地勢は、ヨーロッパ大陸の西部を占め、大西洋と地中海にはさまれている。大部分が平地で地味は豊か。イタリア・スイスとの国境地帯はモンブラン (4,807m)をはじめとするアルプス山脈・ジュラ山脈が走り、スペインとの国境にはピレネー山脈があつて、北東を除き、山と海に囲まれている。中部は中央山塊と呼ばれる高原地帯。セーヌ川はドーバー海峡、ロアール川・ガロンヌ川は大西洋、ローヌ川は地中海にそれぞれ注いでいる。気候は北大西洋の影響で温かな気候をもち、国土の大半が温帯気候 (Cfb) (注1)である。言語はフランス語、ブルトン語、プロバンス語、バスク語、ドイツ語。民族はフランス人(先住民族・ケルト族・ローマ人・フランク族などの混合)ヨーロッパ各国の帰化人・ブルターニュ人・バスク人。(注2)

日本の場合、地勢はアジア大陸の東縁、大西洋の北西に連なる花采列島。環太平洋造山帯の一部で、列島には多くの摺曲山脈、火山帯、地震帯、断層線が走り地帯構造は複雑である。気候についてみると南部は温帯気候(Cfa) (注3)、北部は冷帯気候 (Dfa) (注4)である。モンスーンの影響が強く、6～8月は南東モンスーンにより多量の雨がもたらされる。言語はアルタイ語系の日本語、民族はアジア人種の日本民族、朝鮮人、中国人、北海道に少数のアイヌ人である。(注2)

このような両国の概要を踏まえて、結果について考察する。まず色相別の色数では赤系が多く、更に黄赤系では圧倒的である。逆に最も少なかったのは紫系と緑系である。この結果は両国にほぼ共通している。従って両国の気候・風土の違いは色数とは関連していないと考えられる。ただし両国共に温帯気候と

いう共通性は認められる。色数の多い色は嗜好色とも受け取れるが。潜在的に識別能力を備えている、あるいは識別しやすい色とも言える。また両国の気候には共通性もあるものの日本の温暖湿潤気候に対して、フランス共和国では西岸海洋性気候であり、この違いは色の映り方に差異を生じる可能性がある。国土の歴史に培われた固有の価値観は美意識を左右するものでもあるので、一概に一つの側面から原因づけることはできないが、両国の伝統色における最も重要な差異は、「フランスの伝統色」では青緑系を除けば全ての色相において高彩度の鮮烈な印象を持つ色が多いのに対して、「日本の伝統色」ではグレイッシュなトーンの曖昧な印象を持つ色が多いことである。このグレイッシュなトーンの色が多いことは、江戸時代に灰色や茶色が流行したこととも関連性があると推察される。図にも見られるように、勿論「フランスの伝統色」の中にもグレイッシュなトーンの色は数多く見られるが、「日本の伝統色」の場合には高明彩度が少ないため、よりグレイッシュなトーンの色を印象づけるのである。また現代で一般的に「ベージュ」と呼ばれる色は、黄～茶に類すると考えられるが、「日本の伝統色」の場合「ベージュ」に相当する明彩度色を全ての色相に求めている。

「フランスの伝統色」の場合、赤系～黄系にかけては多くの色数によって多彩な種類の色を識別、受容し、逆に緑系～青系にかけては曖昧さを排斥し、「強さ」を備えた明確な色を望んでいる。このことは、「日本の伝統色」では全く逆になっていることが興味深い。「フランスの伝統色」の場合、高彩度の鮮やかさは「強さ」に置き換えられるが、「日本の伝統色」の場合は随所に「儂さ」のようなもの、やや現実から遊離したイメージが求められている気がしてならない。例え鮮やかな色であっても、そこに求められているのは少なくとも「強さ」ではない。包括的にはグレイッシュなトーンも含めて中明彩度色が多く、中庸の曖昧さが特質的である。色相・彩度・明度が少しずつ異なる色を鋭敏に識別し、微妙な差異を楽しむ美意識の中にこそ日本特有のインテリジェンスがあることを示している。同時にそれが日本固有の価値観とも言えるであろう。

最後に、「日本の伝統色」は概観して古代色から平安，江戸，明治，昭和に至るまで，受容と変遷の歴史を経て形成されたものであり，またその時代にと
もなう流行色と美意識は密接な繋がりがある。今後は更に時代毎の精査も必要
であると考え。また遡れば古来より歴史的にも文化的にも，さまざまな影響
を与えた中国の伝統色との比較も試みたい。

注1) 西岸海洋性気候

注2) データブック オブザワールド 二宮書店

注3) 温暖湿潤気候

注4) 冷帯湿潤気候

資料

- ・ DIC カラーガイド日本の伝統色
- ・ DIC カラーガイドフランスの伝統色

参考文献

- ・ 日本色彩大鑑
松本宗久 河出書房 1993. 11. 30
- ・ カラー・イメージ事典
小林重順／監修
日本カラーデザイン研究所／編
講談社
1983. 12. 10
- ・ 色彩演出事典
北島 耀／編
セキスイインテリア株式会社
1990. 5. 8
- ・ 色彩自由自在事典
末永蒼生 晶文社出版
1994. 10. 15